



## (9) 高山茶はいつからあるのか

須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

高山茶の歴史、それは台湾茶の歴史の中でももっとも最近のものであり、僅か40年程度だと思われる。筆者もそのように考えて、安易にこの歴史調査を始めた面は否めない。勿論高山茶は1980年頃から生産が始まり、1990年代以降台湾茶の主流となったと言ってよいのだが、その歴史的な一面を探っていくと、何と日本統治時代から、既にあったのではないかと思われる事象を今回の旅で発見し、少し戸惑ってしまった。

### 高山茶の定義

高山茶の定義は『海拔1000m以上の茶葉を使って作られた部分発酵茶』であると、どこを見ても書かれている。ところがそれはいつどこで誰が決めたのか、と聞いてみると、茶の専門家と言われる人々でさえ、はっきりと答えてくれないので、ちょっと面食らってしまった。茶業改良場の台湾茶の分類にはちゃんと『部分発酵茶 高山茶』と表記されているのに、その定義が如何にして生まれたのかが分からないとは、何とも不思議だ。

ある人に『高山茶とは商品名』であり、それは某茶業の老板(オーナー)が商品として販売する時に便利だから命名したのだと言われた。確かに凍頂烏龍茶の里、鹿谷あたりで高山茶のことを聞くと『ああ、あれは凍頂烏龍茶が800m程度で作られていたので、それより高いところで作られたお茶という意味で、高山茶と呼んだのだ』と何度か言われたことがある。ということは、初めは凍頂烏龍茶の技法をより高いところに持って行って作り、その商品名として高山茶が使われたという意味ではないかと思われる。

そういえば、ある茶業関係者が声を潜めて、『標高の問題は政府の行政単位と関係があるかもしれない。ある高度になると担当が農林庁から林務局

になる、といった話も聞いたことがあるよ。茶業の管轄は農林庁だが、高山茶はその範疇外では』と言っていたが、これについては確認できていない。

ところで現在、先ほどの茶業改良場の茶の分類ははっきりと『凍頂烏龍茶』と『高山茶』が区別されており、我々が飲んでみてもその違いは明らかだろう。そもそも分類の違いはどこから来るのか。これも何人もの茶商、茶農家に聞いてみたが、それぞれ独自の説明があり、『これが定義』というものを見出すのに意外と苦労する。

ある茶農家が『理由はよくわからないが標高800mを越えると、空気や土壌など自然環境が大きく変わるように思え、そこで採れる茶葉の質も違ってくる』と言っていたのが印象的だった。凍頂烏龍茶の製法が更に高い山に持ち込まれ、そこで栽培される茶葉の質も高山ゆえの変化を遂げ、その製法も茶葉に合わせて変化していった、と考えるのが妥当だろうか。

結局筆者の理解するところでは、部分発酵茶の区別とは『発酵を含む製法の違い』ではないかと思うのだが、どうだろう。ただ高山茶の定義、そしてその呼称の発祥については依然として判然とせず、今後も継続して調べを進めたいと思う。謎は益々深まってしまった、と言ってよい。

## 高山茶の発祥の地はどこか

高山茶はいつどこで始まったのか。この問いを発すると、またまたいくつかの回答が出てきて困った。ある人は大禹嶺だと言い、ある人は梅山だという。仕方がないので、取り敢えずできるだけ現地に行き、1つずつ確認してみることにした。

台中から車に乗って1時間ほどで山道に入り、九十九折をグルグルと上って行くと、天空橋のある太平という場所に着く。ここに標高 1000m の表示が見えるので、これより上が定義上の高山茶だと分かる。そこから更に小1時間進むと斜面に茶畑が点在する梅山瑞里に到着する。

ここで最初に訪ねたのが幼林製茶廠の林備氏(80歳)。とても元気に梅山茶の歴史を語ってくれた。『この地域には産業がなく、地瓜などを育てるだけのとても貧しい村だった。1979年に鹿谷より茶業者が来て茶苗を持ち込み、茶業が始まった。品種は高山茶向きの台茶6号だった』と具体的な話が出る。茶業改良場の呉振鐸博士(場長)がこの地が茶業に適していると推薦していた、との話もあった。当時は包種茶と凍頂茶の中間茶を狙っていたらしい。

1990年前後にはコンテストでトップを取り、90年代半ばには取引価格も高かったが、1999年の



梅山瑞里 幼林製茶廠の林備さん



梅山瑞里 珈琲に転身した王秋忠さん

921地震の影響などもあり、徐々に衰退していく。2000年代に入ると、各地で高山茶が作られ、競争力を失っていき、他の茶産地の茶葉を扱う茶商へ転換する者、民宿を開く者も出てくる。

最初に瑞里の茶樹を植えた一人、王秋忠氏にも話しを聞いた。彼は以前高雄で造林の経験が10年ほどあり、そこで茶と出会ったというから、それは別の意味で興味深い。1980年頃には鹿谷に茶業研修に行き、呉博士の指導も受け、その品質はかなり向上したと懐かしそうに語る。

だがその後瑞里の茶業は衰退に向かい、2002年王さんは茶に見切りをつけ、林務局と協力して珈琲生産を開始する。今では嘉義県珈琲産業発展協会の創始人として有名になり、台湾におけるコーヒーブームに乗っている。『茶樹はそろそろ植え替えの時期だから、コーヒーへの転換を促進している』という話は今後の方向性の一端を示している。

## 梅山龍眼村が高山茶の発祥か？

瑞里から龍眼村に車を走らせた。距離的には近いのかもしれないが、山道でかなり時間がかかる。何とかたどり着いたそこは、龍眼林と書かれており、茶畑もあるが、実に見事な竹林が目目を惹いた。『京都の竹林にも劣らないと言われたことがあるので、そのまま残してある』と龍眼林茶の林廣立氏は目を細める。

林さんの父は地元では『龍眼高山茶6人衆』の一人と言われており、標高1100-1200mのこの土地に、1976年に青心烏龍などを植え始めたという。そのきっかけは前年に村が鹿谷を訪問したことだった。鹿谷は当時街作り設計で賞を取ったということで、街作りを模索する龍眼村も見学に出向き、そこで鹿谷の茶業を見た。

村では『茶業で成功するとは限らない』との慎重論も出たが、実はこの村では『日本統治時代にも茶畑はあったし、茶作りの経験もある』ということで、最初に6人の農家が茶を植え始め、茶作りがスタートした。そして1980年頃には、茶を求めて田中、二水あたりの茶商が列をなしたというから、事は成功したと言える。ただ産量が少なく（産量はほぼ同時に始めた瑞里、太和の方が多かった）、宣伝することもなく、それほど有名にはならなかったらしい。

1985年から始まったコンテスト『梅山郷優良茶比賽』で受賞すると、ブランドとしても有名になって来た。1990年頃はバブル期で、都市に茶館が作られるなど、需要が膨らむ。その頃村では議論を重ねた末、徐々に清香型に移行したというから、当初はやはり濃香の凍頂茶に近いものだったのだろう。ただ2000年代に入って作られる清香型の中には、製法の違いではなく、『生産量増加→萎凋

不足→清香になる→消費者が買う（悪循環）』の結果だという話もあった。また『緑色の方が輸入茶との区別もつきにくい』との指摘もあった。

龍眼でも、1990年代に他の茶産地との競争が激しくなり、新しい品種を導入して紅茶製造にトライしたり、未認定ながら有機栽培も開始したりと工夫を重ねてきた。2010年代には高山緑茶にも挑戦したがうまくいかず、今はギャバ茶なども製造しているというが、今後も茶作りが続くかどうかは分からない。

もう一軒、やはり父親が龍眼高山茶6人衆の一人だという王克明氏を訪ねた。ここで先ほど話に出た『日本統治時代の茶畑』について、詳しく聞くことができた。『1920年代、既にこの地に18ヘクタールの茶畑が存在していた。高雄の建築家、簫佛助という人が投資（理由は不明）し、茶作りが行われた。茶樹は安溪から武夷種が持ち込まれたか、山にあった蒔茶が使われた。製茶法は鉄羅漢茶を作る製法が伝えられたとの伝承があるようだが、よく分からない。茶は担いで鉄道の通る大林駅まで運ばれ、そこから高雄へ送られた。ただ1936年に簫氏は撤退、その際にその茶園を譲り受けたのが、祖父の王邦舜だった』という。

王邦舜氏は1920年代から茶園管理人だったともいう。そしてもう一つ、興味深い名前が出てき



梅山 龍眼林茶の林廣立氏



梅山龍眼村 日本時代の茶園管理人の孫王克明氏

た。『製茶師として、福記茶行の王泰友（茶作り指導者、有名な焙煎師）の名前を聞いている』というのだ。王泰友氏と言えば、茶葉を布に包んで揉捻する布球茶製法を台湾で広めた人として有名な人物。後で調べてみると、福記は台北大稻埕に今も店を構えているが、当時は梅山に近い斗六に店があったと言ひ、1939年頃にこの地域に来て、その製法を伝授した可能性はあると思われる。（1939年に南投名間で布球茶製法を伝授したようだ）

ということは、半球形の茶葉が海拔 1000m 以上の場所で、日本時代に作られていた可能性が浮上する。もし本当なら、これは『高山茶の原型』ではないのだろうか。こういうお茶は台湾の他の地域にはその時代なかったのだろうか。その後茶園管理人は、2代目の王清鑛氏に引き継がれ、細々と茶葉が行われていたらしい。1955年頃にはこの地域にも公路が通って、交通が便利になり、そして70年代の高山茶開始を迎えたという。

因みに話に出た台北大稻埕の福記茶行を訪ねて、このあたりの歴史を王泰友氏の息子である王平雄氏（77歳）に聞いてみた。『確かに店が台北に移ったのは1954年のことで、自分も斗六で育った。1940年前後、父は文山から名間まで数多くの人に布球法を教えて回っており、師と慕う人も多かった』と説明する。

そして王泰友氏本人が生前インタビューを受けて書かれた『打開茶箱的故事』（曾至賢著 2007年出版）によれば、『王泰友は民国30数年（1940年代）、早くも高山茶発祥の地である嘉義梅山龍眼林で現地の茶農王、王清鑛に製茶指導をした。その茶は熟果香の凍頂型だ』と書かれているから、この話にはグッと信憑性が出てくる。

王泰友氏は18歳の時、鉄観音茶の産地、福建省安溪から台湾に渡って来たのだが、既にその際布球茶製法を体得していた可能性がある（安溪の製茶法については、鉄観音茶の回でその歴史を紐解く予定）。当時は『高山茶の概念』はなかったであ

ろうが、標高 1000m 以上の地で、古い凍頂式の製法などを使って茶が作られていた事実を考え合わせると、高山茶の歴史は40年ぐらい遡るのではないかと思ってしまうが、これを一般に『高山茶』と呼ぶかどうかは意見が分かれるだろう。

因みに福記茶行を訪ねると、店の隅にお婆さんがちょこんと座っていた。何とその女性が王泰友氏の奥様だったのには驚いた。王氏自身も100歳まで生きたが、奥様（何とお名前は『茶』さんだそう）もちょうど100歳だということからすごい！これはやはりお茶の力だろうか。お店は既に3代目の王品富氏に引き継がれ、お店もキレイに改修され、今も迪化街で営業している。

更にもう一人、龍眼高山茶6人衆の一人である王定氏（82歳）に直接話を聞くことができた。1970年代以降の高山茶の歴史の話は、ほぼ前述の2人と同じであったが、やはり王氏の祖父も1920年代茶園管理に関わっていたという。そして現在所有している茶園の中に、樹齢100年と思われる茶樹も現存しており、少なくとも当時既に茶作りが行われていたことが窺われた。

そして何と所蔵していた42年前に王氏の母親が作ったという茶を振る舞ってくれた。42年前と言えば、ちょうどここで高山茶が始まった時であり、その母親が既にお茶を作っていたことから



台北福記銘茶 王泰友夫人と



梅山龍眼村 龍眼高山茶6人衆の一人である王定氏(右)



梅山龍眼村 42年前に作られた茶葉

も、製茶の事実が分かってくる。茶葉は既に陳年茶となっており、プーアル茶のような感じであったが、少なくとも清香型とは思われず、往時王泰友氏より製法を教わった通りに作っていたのでは、と感じされる物だった。

## 阿里山高山茶の始まり

日本人に一番馴染みのある高山茶は、やはり阿里山茶だろうか。15年も前から何度も通っていたが、ここは一体いつ高山茶が始まったのか、という話をきちんと聞いたことはなかった。3年前のある日、偶然にも阿里山公路沿いにある茶農家兼民宿に1泊する機会が有り、そこではじめてそ

の歴史を聞いた。

隙頂の公路脇に建つ築100年を越える古民家。気になって近づいてみると住人が優雅にお茶を飲んでいた。こちらに気が付くと日本語で『お茶飲んでいくか』と聞かれたので、これ幸いと座り込む。林再成氏(当時84歳)に『阿里山のこの付近にはいつから茶畑があるのか』と聞くと『民国70年(1981年)頃かな』との答え。政府の農業関係者がやって来て、『これを植えると儲かるよ』と言われて始めたそうだ。実際に育てるのには時間がかかったが、一生懸命植えたところ、1980年代から90年代の高山茶ブームで、相当に利益を上げることが出来たという。『まあ阿里山高山茶、などと言っても、高々35年ぐらいのもんだよ』とあっさり言われてしまう。

更には『その前に阿里山に公路が通ったのは大きかったな。それまでは歩いて嘉義に降りていたから、茶の輸送にも大きく役立った。付近の住民も駆り出されて、道路工事をやったよ。給料はバナナや野菜だったけどな』と懐かしそうに語る。それは相当の難工事だったようで、恐らくは辛い労働だっただろうが、今はいい思い出ということか。この家を守り、目の前の公路作りに自ら参加して、阿里山の茶園経営にも最初からかかわっている。そして今でも自分用に発酵度の高い、焙煎の効いたお茶を作っている、こんなお爺さん、完



阿里山隙頂 初期に茶を植えた林再成氏

全に歴史の生き証人である。林さんのお茶、それは初期高山茶のイメージそのままであった。

翌日はその息子さんに高山茶が始まった当初に植えたという茶樹がある茶畑を案内してもらった。茶畑は隙頂ではなく、車ですぐの距離にある隣の龍頭にあるという。この茶畑、斜面に茶樹が株ごとに植えられていて、誠に原始的？なところで、一部枯れているものもあり、驚いてしまった。『35年前、阿里山に茶樹が植えられた初期はこんな感じだった』という。まばらな茶樹を見て、何となくダージリンを思い出す。

隣の畑は畝になっていた。阿里山には在来種と言われている茶樹が沢山あるとのことだったが、こちらは在来種を差し木して植え直し、農薬も化学肥料も使わず、丁寧に管理していた。茶葉が肉厚で、エキスが内包しそうでよい。どんなお茶が出来るのだろうか。

更には老茶樹があるというので、そちらも見に行った。阿里山公路を入ってすぐの場所に、その樹木はあった。かなりの背の高さがあり、何本かある。これはカメラアタリエンシスだろうか、それともアッサム種が育ったのだろうか。もしアッサム種なら、台湾に持ち込まれて100年程度のはずだが、この村の言い伝えでは、この茶樹は150年以上経過しているらしい。いずれにしても阿里山にも茶の痕跡がある



阿里山龍頭 阿里山に残る古茶樹

のは、何となく高山茶に繋がる予感がする。

そして今回、この高山茶の調査で梅山に入ると、前述の龍眼や瑞里などから、太和村樟樹湖などを經由して、阿里山鉄道の奮起湖駅の方面に伝わっていったとの歴史を聞くこともできた。その時期は隙頂とほぼ同じ1980年頃なので、基本的に阿里山にはこの2ルートから同時に高山茶が入り、その後石棹などへ広がり、高山茶の一大産地に発展していった、というのが歴史の流れのようだ。



阿里山龍頭初期の茶畑



阿里山の入り口樟樹湖の茶畑